

■□ 解題

“見えない”格差・困窮・貧困と 日本経済を考える

—働き、学び、育て、暮らす現場の視点から—

松尾 匡 (立命館大学経済学部教授)



きょうのテーマは「“見えない”格差・困窮・貧困と日本経済を考える」ですが、貧困や格差というと、20年ぐらい前には「日本は豊かになって、私たちは普通の中流のいい暮らしをしている。しかし、どこかに貧困な人たちがいますよ」という設定として語られることが多かったと思います。しかし、いまや普通の多くの人たちでさえ自分自身の暮らしが非常に厳しい状態にあると感じている状態だと思えます。

したがって、どこか知らないところに自分とは違う貧困があるという状態ではなくなっていて、以前であれば「暮らしの苦しい貧困な人たちを助けましょう」という話になると、「いい暮らしをしている私たちがお金を出し合って、そういう人たちを助けましょう」という話として受けとめられてきたのですが、今は「自分たちも暮らしが厳しいのに、なんでそういう人たちを助けなければいけないのか」と、反感を買うような状態です。

そのため生活保護を受けている人たちに對するバッシングなど、弱者に対するバッシングが激しくなっているという状態があると思いますが、ここではそういういろいろな分野における貧困が存在する実態を見ていくなから、「じつはそれは私たちみんなの暮らしが苦しいこととつながっていて、そうした問題を解決しようとするのが、結局は私たち全員の暮らしをよくする

ことにつながるのではないかと」という問題意識から取り組んでいきたいと思えます。

この20～30年の平成不況で、「失われた30年」などと言われますが、このような状態のなかで日本経済は、じつは大変な貧困が蓄積されて、そもそも世の中は一人ひとりの人間の暮らしが再生産されなければ成り立っていかない（いわゆる労働力の再生産）はずなのに、それが壊れていくという現状があります。

きょうは、こうした問題にいろいろな現場で取り組んでおられる方から、現場の状況をお聴きし、その取り組みと、そこからどのような展望が見えてくるかということをお聴きしようと思っています。現在の貧困でいえば、もちろん非正規化等が進んでいて、賃金がすごく低くなり、労働条件も悪くなっているという、働く人たちの問題があります。不況が続き、規制緩和も続いて、大きな資本ばかりが儲かるようになり、中小零細企業や自営業の人たちが苦境に立たされているという問題もあります。さらにこの先、消費税が上がりますので、ますますその人たちが苦境に陥るという問題もあります。

このように、これまでメインストリームと思われてきたような働く人たちも苦しい状態におかれているということがありますし、従来から弱者とされている人たちはますます厳しい状態におかれています。たと

えば障害のある人たちと、障害のある人を支えて働いている人たち、それから子ども、特に貧困な家庭で育つ子どもに社会の矛盾がいちばん集中しています。

きょうは、そういう状況とがっぷり向き合って、なんとかしようとして取り組んでおられる5人の方にお話を伺う予定です。現場の話というと、「その現場の特殊な状況なのだ」という話にされがちですが、そのなかからいろいろな現場に共通する、そして私たちが取り組んでいるさまざまな現場にも共通する普遍的なものは何かということを見いだしていけたらと思っています。

そして、そのなかから共通して取り組んでいける課題一世の中をこんなふうに変えていったら、これをもっと取り組みやすくなるのではないかという課題、抜本的解決に向けていけるのではないかというようなものを見いだしていけたらと思っています。



1 日目 シンポジウム会場風景